

『春に』・『握手』の2作品について、漢字と語句の意味を知り、音読する。「まで、各自終了していることと思います。

今回は『春に』をもう一度読み、自分なりに感じてみましょう。

**本時の目標**

作者の思いや表現の特徴を捉えよう。

**単元の流れ**

① 『春に p16』と『握手 p17』を読み、**提出用プリントに取り組む。**【本時】

② みんなの意見を発表し合いながら、作者の思いや表現の特徴を捉える。

③ 自分の考えを持つ。

④ ①と③で学んだことを踏まえ、朗読の工夫をする。

⑤ 朗読する。

○ 作品から受ける印象・気づいたこと・疑問を書いてみましょう。

この作品から受ける印象

この作品を読んで気づいたこと

この作品を読んでもった疑問

提出してください。

○このプリントをもとに、授業が始まったら②③⑤に入ります。  
その前に、作者からの言葉をこちらに紹介しておきますので、読んでみてください。

作者から

谷川俊太郎

詩は理解しなければならぬものではありません。むしろ理解しようとする、詩から遠ざかってしまう場合もあり得ます。言葉で組み立てられている以上、詩にも意味はありますが、散文とちがって詩は意味だけでできているわけではありません。散文で言い換えることのできないもの、それが詩です。逆に言えばもし散文で置き換えることができるなら、それは詩ではないともいえるでしょう。詩は理解するものと言うより、味わうものなのです。言葉の音の連なり、イメージの連なり、そして読む人間のこころの中の自由な連想の連なりを、おいしいごちそうのように味わってほしい。タンパク質がこれだけ、ビタミンCがこれだけ、カロリーはこれだけというふうには分析してほしくない。

そういうことを前提にして言うと、この「春に」という私の詩も、読者である子どもたちにどれだけの共感を呼び起こすことができるか、というところにその値打ちの分かれ目があると思います。この詩は思春期の私自身の経験をもとにして作られています。誰にでも覚えがあると思いますが、からだどころが大きくなると転換期を迎えるその時期、私たちは自分でもとらえきれない矛盾した感情に襲われます。「よろこび」のうちに「かなしみ」が隠れている、「いらだち」とともに「やすらぎ」がある。言葉の上では分裂しているように見えるかもしれませんが、感情とはもともとそういう矛盾に満ちたものではないでしょうか。簡単にひとつの名で呼ぶことができない錯綜さくそうしたものの、それが感情というものではないでしょうか。

ひとつの言葉で割り切ることのできない感情の豊かさと奥深さは誰にでもあるのです。でもそれを私たちはともすると、出来合いの言葉で片づけてしまおうとする。詩はたとえ曖昧あいまいになろうと、常識に反しよう、正確に人のこころをとらえたいと願います。もしこの詩を味わおうとするなら、いちいちの語句の解釈もさることながら、この詩に書かれているようなこころの状態に気づいてもらわなければなりません。そのためには声に出して読んでみることも必要でしょうし、お互いの経験を話し合うことも必要でしょう。言葉にとらわれず、言葉が指示しているものに共感、共鳴しようとする、それが詩を味わう基本ではないでしょうか。この詩にそれだけの力があるかどうかは別として。

(本書のための書き下ろし)

保管しておいてください。